



病害虫の
見分け方
シリーズ

イネにおけるチョウ目害虫の被害と見分け方

鳥取県 中部総合事務所 農林局 倉吉農業改良普及所 おく たに やす よ
奥 谷 恭 代

はじめに

イネを加害するチョウ目害虫は複数種あり、地域、年次、栽培条件等によって、被害が問題となる種は異なる。植物防疫法に基づく指定有害動植物の対象であるニカメイガ *Chilo suppressalis*、コブノメイガ *Cnaphalocrocis medinalis*、フタオビコヤガ *Naranga aenescens* の3種、および指定有害動植物ではないが、被害がしばしば問題となるイチモンジセセリ（イネツトムシ） *Parnara guttata* が主要種と考えられる。

イネにおけるチョウ目害虫の発生予察や防除対策を講ずるうえで、加害種を判定し、被害を識別することが必須である。ウンカ類と比較すると上記4種の識別は比較的容易である。一方、これら4種の害虫では、昔は多発していたが現在の発生は非常に少なかったり、逆に、これまで問題にならなかった種がいきなり多発し、重要視されるケースも見受けられる。さらに、発生量の地域間差が大きく、特定の地域ではよく見かける種であるが、他の地域では遭遇すること自体が困難であるケースも見受けられる。多発生の周期が長ければ長いほど、また、発生量の地域間差が大きければ大きいほど、その種に接する機会は少なくなり、熟練者から初心者への技術伝承、あるいは技術伝承された初心者の知識定着の際の障壁となる。

そこで、本稿では、上述のチョウ目害虫4種について、将来急な対応が必要となった際に活用いただけるよう、その形態の特徴および被害の見分け方を解説しておく。

植物防疫

I ニカメイガ

1960年ころまではイネの重要害虫であったが、1970年代以降のイネの栽培方法の変化や効果の高い農薬の普及によって被害は激減した。現在、ニカメイガによる被害は日本のほとんどの地域で問題となっておらず、野外で観察することも難しい。しかし近年、一部の地域において発生が増加し、その被害が問題となっている（松倉，2019）。

1 成虫

体長12～15mm、開翅長20～25mmの小型のガである（図-1）。翅の色は灰白色～明るい藁色で、下唇（頭部にあり鼻のように見えるもの）が長く前方に伸びている。前翅は細く角張っており、外縁に7個の小斑点が1列に並んでいる。雌は雄よりやや大きく、翅の色がより白い（図-1）。

2 卵

卵は、直径約1mm弱の楕円形で、数十～100個程度の鱗状の卵塊としてイネの葉鞘や葉身に産み付けられる。産卵直後は白～黄白色で、ふ化が近づくと茶褐色から黒褐色へと変化する（図-1）。

3 幼虫と蛹

幼虫には、淡褐色で暗褐色の縦縞が5本ある（図-1）。ふ化幼虫は体長1～1.5mmで頭部が黒い。生長するにつれ頭部は褐色に変化し、老熟すると体長は20～25mm程度になる。蛹は、15mm前後の紡錘形で、色は艶のある茶褐色である（図-1）。

4 被害

イネの被害は、幼虫による茎の加害である。

Species Identification and Damage Characteristics of the Four *Repidoptera* Pests of Rice. By Yasuyo OKUTANI-AKAMATSU
（キーワード：ニカメイガ、コブノメイガ、フタオビコヤガ、イチモンジセセリ（イネツトムシ）、種の識別、発生予察）